

ペルテス病

座長：日下部 虎 夫・大 出 武 彦

セッション 1 では各肢体不自由児施設でのペルテス病の保存的治療成績が報告され、全体的な治療成績良好の理由として入所により確実な containment 療法が可能であること、免荷療法が徹底できること、充実したりハビリテーションができることなどが挙げられた。セッション 2 では演題内容から保存的治療の方法とその限界、免荷療法の必要性、手術療法の適応・タイミングとその方法などに関しての討論が期待された。

大出、塩崎、中村、下村らは入院での保存的治療の比較的安定した成績を報告しているが、大出や中村は入院の保存治療にも限界があり、高年齢発症例や Herring group C などにおける関節適合性不良例、大転子高位例、脚長不等例に対する手術的治療の必要性を述べている。しかし、手術的治療の厳密な適応と保存的治療から手術治療へ移行するタイミングについては明らかな結論はでなかった。桶谷と黒田の報告は外来通院での装具療法の成績であり、桶谷は西尾式外転免荷装具で Stulberg I, II の良好群が 67.3% と比較的良好としているが、黒田は不満足な治療結果としており、装具装着前の入院での関節拘縮除去の重要性と低年齢例における装具療法の困難性を述べている。外来装具療法における装具療法の選択や compliance の問題が示唆された。保存的治療中の免荷の必要性和意義については残念ながら明らかにされなかった。塩崎らはプールでのトレーニングについて骨萎縮との関連で述べているが、適度の荷重負荷と運動療法による骨・軟骨リモデリングの観点から興味深く今後さらなる検討を期待したい。

堀内による大腿骨内反骨切り術の長期成績の報告では、その不良例は高年齢発症例と Catterall IV にあり slotted acetabular augmentation の必要性を述べているが理論的考察が少し不十分と思われた。北小路は学童期発症例に対するソルター骨盤骨切り術の長期成績の報告でその成績に影響する因子として治療時期の重要性を述べているが、重症度や年齢に応じた手術術式の変更や工夫に関しての深い討議はなされなかった。

最後に、今回を含めてペルテス病に関する討議において実感することであるが、ペルテス病治療に関して多施設合同での発症年齢、重症度、治療開始時期を統一した治療方法別治療成績の検討が必要であることを強調したい。